

ビバハウス便り NO.106 ビバのピンチの救い主・卒業生のお母さん

2015.6.8 ビバハウス責任者 安達俊子

6月に入り、ビバハウスの周りから、かっこう鳥が去った今、草木の緑が一段と濃さを増し、初夏の訪れを知らせてくれております。

そんな6月6日。ついに安達尚男が、退院の日を迎える事が出来ました！自分の足で立って、歩いてビバハウスに戻ってくる事が出来たのです！！

主治医の岡本五十雄先生が最後に言って下さった、「尚男さんの76歳の人生で、3度脳にメスを入れて、脳を傷つけていながら、これほどまでに回復できた人は本当に少ないです。これからの残された人生、やり残している若者支援の仕事に全力を尽くして下さい。」とのお言葉が胸に染みしました。

至らないことだらけの安達尚男に再び仕事に向かう力を与えて下さった、緊急手術担当の小樽市立病院、80日間のリハビリで奇跡の回復を実現させて下さった医療法人「ひまわり会」札幌病院の医療担当の皆様、そして、見えない力に、ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。

安達尚男の退院までの間、大変大勢の方々から物心両面でのご支援を頂き、2名のスタッフの大奮闘もあり、なんとか今日までやってくることが出来ました。併せて、これまでの15年間、どれほど多くの皆様のご支援でビバが存続できたのかをかみしめています。既にご着任頂いていますが、茨城県出身のビバ卒業生のお母さんはビバの一大事と、全く自発的に2か月間のボランティアのお申し出を頂き、毎日主に食事作りを中心として、どれほど助けていただいているか分からない程です。お母さんは、お聞きしますとつい最近まで看護学校教員としてのお勤めをなされていた方です。退職と同時にビバに駆けつけてくださいました。本当は長い間の人一倍厳しいお勤めの後ですからまずゆっくりとお休み頂かないとならないところを本当に申し訳なく、またどれほど有難いことか分かりません。ご家族の皆様のご理解に、心より感謝申し上げます。この卒業生とはつくば市の「子どもと教育センター」を通じてビバとのつながりができ、過去にビバに一定期間滞在されました。お母さんのお話では、現在は毎日大学に通っていられるそうで、私たちも大喜びです。この「センター」からは他にも、家庭内で問題のあった少年を迎えたこともあり、彼は現在、父親の勤務する大学病院でのアルバイトの仕事のほかに、家事一切を取り仕切り、家族みんなに感謝されているとのことでこれもうれしい限りです。彼のお母さんは季節ごとに私たち二人用の下着を送ってくださり、お蔭でここ数年私たちは下着を買ったことがないほどです。

ビバの中にも新しい風が初夏の知らせと共に吹き、帯広から新しくN君（24歳）が入所しました。彼は高校中退後、アルバイトを転々としながら何もしない生活が続く、親子関係が悪化し、まず一人になりたい、親との距離を取りたいとビバハウスにやってきました。入所の日には親ではなく伯父様が彼を連れてきて、なにかと気にかけてくれていました。今でもかなりの頻度で電話がきているようです。親との関係が悪化した場合に、家族外にそのような方がいるというのも非常に重要だと改めて感じさせられました。

その彼も入所してすぐに農業のアルバイトに挑戦し我々にできるところを見せてくれました。感激です。

元々、人との関わり、コミュニケーションをとるのが苦手で、それも克服したいと本人は言っています。今は一旦アルバイトを終了し、グループワークにも挑戦してメンバーとコミュニケーションを取ろうとしている最中です。